

ROCKY

*15ラウンドを闘いぬくことに、ロッキーは永遠の愛をかけた……

*76年度ゴールデングローブへ最優秀作品賞受賞作品



ロッキー

シルベスター・スタローン◆タリア・シャイア
バート・ヤング◆バージェス・メレディス

製作アーウィン・ウィンクラー◆ロバート・チャートフ◆ジーン・カーフウッド
監督ジョン・G・アビルドセン◆脚本シルベスター・スタローン

音楽ビル・コンティ◆サントラ盤/ユナイテッドレコード◆原作/二見書房刊(シルベスター・スタローン主演)
シリア・ア・ラ・ラ・ラ
(テラックスカラー) United Artists ユナイテッド映画
A Transamerica Company

東谷 空の情話の公開自 谷東 空の情話の公開自

ロッキー

デラックスカラー



●スタッフ

監督……………ジョン・G・アビルドセン
 製作 {……………ロバート・チャートフ
 ……………アーウィン・ウィンクラー
 脚本……………シルベスター・スタローン
 音楽……………ビル・コンティ

●キャスト

ロッキー……………シルベスター・スタローン
 アドリアン……………タリア・シャイア
 ポーリー……………バート・ヤング
 ミッキー……………バージェス・メレディス
 アポロ……………カール・ウェザース

United Artists
A Transamerica Company ユナイテッド映画

ROCKY

◆それは青春を、人生を、そして男を賭けた素晴らしい闘いだった！

勇壮なファンファーレの響きがいやが上にも満場の興奮をかきたてる。彼らが古代ローマ市民なら、四角い檻に放たれた二匹の獣はさしずめコロシラムの剣闘士か——。片や黒い筋肉に現へビー級王者の貫録とパワーを誇示するアポロ。一方は「イタリアの種馬」の異名をとる挑戦者ロッキー。キャリア・戦歴ともに天地ほどに開きがある両者は、気概の上でもそれ以上の差があった。このビッグイベントを建国二百年のショーと見なしたチャンピオンに対し、挑戦者にとってそれは、青春のすべてを、そして何より男を賭けた闘いだった。15ラウンド終わってもまだ立っていられたら、ただの三流ボクサーでなかったことを証明できる！下町の仲間と恋人の熱い視線を背に受けたロッキーは勇躍孤独のリング上へ——映画史上最高の興奮を突きあげるフル・ラウンドの死闘の幕はここに切って落された！

◆比類なき感動の波、興奮の渦！ 全米観客が総立ちになったラスト15分の名ファイト！

サウスポーから操り出したロッキーの重い左がアポロのあごに炸裂した。エイトカウントのダウン。この一発をきっかけに両者は手負いの獅子と化した！7、8、9……10ラウンド……予想外のロッキーの善戦にたじろぐアポロ陣営。どす黒く腫れあがった二人のまぶたが死闘の凄まじさを物語る。タオルを入れようとするセコンドの動きを制して最終ラウンドへ突入していくロッキーの姿に万余の観客が熱狂のシュプレヒコールを送る。全米の批評家、観客が手に汗を握り、釘付けあるいは総立ちになった名場面、映画史上に輝く屈指の好ファイトであり名勝負だ。

◆十年に一人の超大型新人 シルベスター・スタローンの魅力！

これは一介の四回戦ボーイとして明日なき青春を生きてきたみじめなブライズファイターを主人公に、下町人情の機微と哀感を絡ませた異色のボクシング映画であり、不屈のヒューマン・スピリットへの讃歌を限りなく謳いあげた感動のドラマだ。主人公ロッキーを演じるシルベスター・スタローンは、役柄と同じくイタリア系で貧民窟の生まれ。

持って生まれた文才を駆使して三日間で書き上げた「ロッキー」の脚本をひっさげてハリウッドへ乗りこみ、啞然とする業界を尻目に自ら主役を演じてしまった凄い奴。「ジェームズ・ティーン、マロン・ブランドが登場した時以来の衝撃」と評判の高い恐るべき男である。

◆出色のラブストーリー、チャート急上昇の哀切のテーマ！

ロッキーの恋人アドリアンに扮したタリア・シャイア的好演も評判だ。ロッキーとの間に小さな愛を育くみ、自らもふくよかな女に変身していくプロセスの秀逸な演技。ラスト、群衆をかきわけて、戦い終えたロッキーの胸に飛びこむ思わずジーンとくるシーン。ラブストーリーとしても出色の構成を見せているのが映画「ロッキー」なのだ。

さらにこの感動を側面から盛り上げるのが「グリニッチ・ビレッジの青春」などの新鋭ビル・コンティの音楽。特に全米ヒットパレード急上昇の哀調のメロディ「ロッキーのテーマ」が素晴らしく、早くも数種類のカバー・レコードが名乗りをあげている。

◆感動のカウンター・パンチに全米批評家はノックアウト！

一昨年の「カッコウの巣の上で」のような凄まじい口込みでじゅうたん爆撃のような大ヒットを続ける「ロッキー」の全米興行。ゴールデングローブ作品賞(1/2)も獲得して、その作品評価はとどまるところを知らない。感動の声の主だったものを捨ててみると……

「クライマックスのファイトは息もつかせない。どんな懐疑的な観客も、映画に飽きたどんな人々も、ラストの感動には喝采するだろう」

——〈ニューズウィーク〉

「電撃的興奮！早くも一人の男のライフワークがやってきた。この種の感動をそうそう体験できるものではない」

——〈ロサンゼルス・タイムズ〉

「パンチのある感傷的作品」

——フランク・リッチ〈ニューヨーク・ポスト〉

「素晴らしいラブストーリー。素晴らしいヒューマン・コメディ。センセーショナルな才能が創ったセンセーショナルな感動！」

——〈ニューヨーク・デイリー・ニュース〉

* 76年度アカデミー賞にノミネート〈作品賞・主演男優賞・主演女優賞・監督賞・オリジナル脚本賞他〉

●空前の話題で公開迫る！ 渋谷東急 (407) 7029